

## 『バルラームとヨサファト』——試訳と解題

酒見 紀成\*

(平成24年8月20日受付)

### *Barlaam and Josaphat* —— a Japanese translation and explanatory notes

Kisei SAKEMI

(Received Aug. 20, 2012)

#### 試 訳

彼に神の恩寵が働き、その結果、国王のヨサファトを改宗させたバルラーム、彼のことをダマスカスのヨハネスが大いに努力して物語にした。その頃、全インドはキリスト教徒や敬虔な修道士でいっぱいだったのだが、そこへある王が現れ、キリスト教徒、特に修道士に対し大々的な迫害を行った。彼の名はアヴェヌールといった。それで王の友人で、宮廷の重臣の一人が神の恩寵によって教えられ、王の城を出て修道士の教団に入るといったことが起こった。王はそれを聞くと、気も狂わんばかりに怒り、砂漠中で彼を捜させ、ようやく彼は見つかった。それから友人は王の御前に連れて来られた。かつては高価な衣服や、贅沢な食物でいっぱいの料理で輝いていた彼が、とても汚い上着を着、飢えのために痩せ衰えているのを王はじっと見て彼に言った。「おお、この愚か者！お前のような知恵ある者が何故悪い宗教に改宗したのだ？子供のような真似をして」すると彼は王に言った、「もし私の頼みを聞いて下さるなら、どうか陛下の敵どもを遠ざけて下さい」すると王は余の敵とは誰かと彼に尋ねた。すると彼は「怒りと強欲です。これらは真実を見たり、聞いたりするのを妨げるからです。そして私の申すことがお聞きになれますよう知恵と正義とを味方になさって下さい」と言った。王は言った、「お前の思うところを申せ」すると彼は言った、「愚か者は有るものを無いかのように顧みず、そして無いものを有るかのように手に入れようとします。しかし、有るものを味わったことがない者は、それらの甘さを楽しむことは出来ず、また無いものの本質も分かりません」そして彼がキリストの受肉についていろいろと説明すると、王は言った、「もし余が最初に怒りを余の助言者から遠ざけると約束していなければ、直ちにお前の体に火をつけるところだ。さっさと立ち去

れ。そして二度とお前を見なくてすむよう余の目から逃げよ。もしお前を見たら、最も酷いやり方でお前を殺すであろう」すると神の僕はたいそう悲しみながら帰って行った。と言うのは、殉教できなかったからです。

王はそれまで長いこと妻との間に子供がなかったのだが、ついに息子が生まれ、ヨサファトと呼ばれた。それから王は息子の誕生を祝って偽りの神々に生け贄を捧げるため大勢の臣下を集めた。そして息子が将来どうなるか尋ねるため五十五人の占星術師を集めた。そして彼らは一様に、王子はたいそう裕福におなりでしょうと答えた。そして彼らの中で最も賢い占星術師が言った、「陛下、この御子は陛下の国ではなく、比較にならないほど良い国に生まれるでしょう。そして確かに、陛下が迫害なさっているキリスト教徒の宗教に帰依なさるであろうと思われます」彼はこれを自分の考えからではなく、神の靈感によって言ったのだった。王はこれを聞くと、たいそう心配し、王子のために城市の外側に立派な宮殿を造らせ、その中に息子を住まわせた。そして選び得る最もすぐれた若者たちを息子の周りに置き、そして彼らに死や老いや病や貧困など、王子を不快にさせるようなことは決して話題にせず、彼が来るべきことを決して考えないよう、彼の心がいつも喜びで占められるように、常に楽しいことを吹き込むよう命じたのだった。そして王子の従者の誰かが病気になれば、王は直ちにその病人を取り除き、代わりに健康な者を置くよう命じた。そしてまた王は、何人（なんびと）も王子の前でイエス・キリストの名を口にしてはならぬと命じた。

その頃、王の傍に、密かにキリスト教を信じている男がいた。彼は王の側近である高貴な領主たちの中の重臣の一人であった。ある時、彼は王と共に狩りに行き、獣に脚を

\* 広島工業大学工学部電子情報工学科

傷つけられた一人の男が地面に横たわっているのに気づいた。その男は騎士に、私はある事でお役に立てると思うので、どうか私を連れて行って欲しいと頼んだ。すると騎士は言った、「喜んで連れて行きたいが、どうやって私の役に立つことが出来るのか分からない」とすると哀れな男は言った、「私は言葉で癒す者です。と言うのも、もし誰かが言葉で傷つけられたら、私は彼を癒せるのです」騎士は彼の言ったことは何とも思わなかったが、神の愛のために彼を連れて帰り、癒してやった。それから暫くしてこの騎士が王にとっても大事にされているのを見た者たちが妬んで、彼を王に訴え、彼はキリスト教に改宗しただけでなく、王から国を盗もうとしていると言った。それを実行するため彼は仲間たちを扇動している、と。「もし陛下がそれが真実かどうか知りたと思われるなら、彼を密かに呼び出し、この人生は空しく、間もなく終る、だから余はこの世の栄光を捨て、修道士になろうと思う、余がこれまで無知からひどく残酷に迫害してきた修道士に、と仰って下さい。そうすれば彼が何と答えるかお分かりになるでしょう」王が彼らの助言に従ってそのように言うと、彼らの裏切りを何も知らなかったこの騎士は、喜びの余り泣き始めた。そして王の考えをたいそう褒め、出来るだけ早くそうなさいませ、と勧めた。王は彼がそのように答えるのを聞くと、自分が聞いたことはみな本当だったのだと思い、怒りでいっぱいになったが、彼には何も言わなかった。それでこの騎士は、王が自分の言葉を悪く取ったことに気づき、家に帰った。そして言葉の医師がいることを思い出し、行ってその話を順を追ってすべて話した。すると彼は答えて言った、「王は貴方が王国を奪い取ろうとしていると本当に思っているのです。さあ、私の助言に従って行動して下さい。すぐに立って貴方の頭髪を刈り込み、租毛の衣をまとい、修道士の服を着るのです。そして明朝早いうちに王の御前へ行きなさい。そして王が何事かとお尋ねになったら、このようにお答えなさい。陛下、私は陛下について行く所存です。なぜならもし陛下が行きたいと思われる道が困難なものであれば、私が一緒にいた方が容易になるからです。陛下が順境にあって私を家来とされたように、逆境にあって私を家来にして下さい。私はもう用意ができております。陛下、何をぐずぐずなさっておいでですか」と。王はそれを聞くと、非常に驚き、不実な中傷者たちを叱責した。そして彼を大切にし、これまで以上に彼に敬意を表したのだった。

それから宮殿で育てられた王の息子は成年に達し、あらゆる学問について最高の教育を受けた。そして何故父は自分をこんな人里離れた場所に閉じ込めたのだろうとひどく訝り、一番親しい召使いの一人を呼んだ。そして密かにそ

のことを彼に尋ね、自分は外出できないので、とても憂鬱であり、食べ物も飲み物も役には立たぬ、と言った。彼の父はそれを聞くと、落胆し、悲しんだ。そして元気のいい若者たちと馬を用意させ、王子と共に馬に乗って駆け、楽しんで来るよう命じた。ある日、この若い王子が楽しみに出かけた時、一人の癩病人と盲人が彼の方にやって来た。彼は二人を見ると、とてもまごつき、彼らはどうしたのかと家来の一人に尋ねた。すると家来は、彼らに降りかかったのは病気です、と教えた。すると、あの病気はすべての人に降りかかるのか、と王子は尋ねた。「いいえ」家来は答えた。すると、王子は尋ねた、どんな人たちがその病気にかかるか分かっているのか、それとも彼らは偶然かかったのか、と。家来は答えた、「人間の運命を知り得る者がいますでしょうか」とすると、王子はその光景の珍しさに考え込んだ。そして王子はそのような病気が長い寿命の結果だと知ると、最期はどうなるのかと尋ねた。彼らは「死でございます」と答えた。王子は尋ねた、「死はすべての者の最期なのか、それとも一部の者だけか」みな死なねばなりません、と彼らが言うと、何歳にてそれは訪れるのか彼は尋ねた。「八十歳か百歳で訪れ、何人をも死は捕えます」と彼らは答えた。王子はこれらのことを知ると、深く考え込み、悲しんだ。が、父親の前ではいつも楽しそうな顔をしていた。しかし、これらの事がらについて教えて欲しいと切に望んでいた。

その頃、荒野に一人の聖なる修道士が住んでいた。完徳の生活をし、敬虔な暮らしをする人で、名をバルラムと叫ぶ。この聖人は王の息子についてすべきことを聖霊によって知り、商人の服を着て、都へ行った。そして王の末っ子の息子と話をし、自分は盲人に光と視力を、聞こえない者には聴力を、口のきけない者には言葉を、愚か者には知恵を与えてくれる貴重な石を持っていますと言った。「それ故、私を王のご長男のところへ連れて行って下され。そうすればこの貴重な石を喜んで売りましょう」と。若い王子は彼に言った、「汝はたいそう知恵ある者のように見えるが、その言葉は汝には相応しくない。今すぐ私とその石を見て、汝の言うことが証明されたなら、汝は王子に拝謁することが許されるだろう」とすると彼は言った、「私の石はあまり大きな効力があるので、健全な視力を持っていない者が純潔を守らなければ、この石を見ることでかえって受けるべき視力を失うのです。私は医者ですから、貴方の視力が混濁しているのがよく分かります。しかし、王のご長男は真に純粋な目を、きれいで健全な目をお持ちだと承っております」とすると末っ子の王子は言った、「もしそうであれば、私は健全な視力を持っておらず、罪に穢れているので、それを見せないでくれ」として彼は修道士のことを王

子に知らせ、王子はすぐに彼を呼びにやった。部屋に入り、王子にたいそう丁重に迎えられると、バルラームは言った、「王子様、外側に現れた私のみすぼらしさを気になさらず、ご立派でした。貴方はすべて黄金で出来た四輪馬車に乗って行き、ぼろぼろの服を着た貧乏人たちに出会った或る気高い王と同じことをなさったのです。彼はすぐに馬車から降りると、彼らに深々とお辞儀をし、そして口づけしました。直臣たちは不満に思いましたが、敢えて王には何も言いませんでした。が、弟君に不平を訴え、王は威厳を損ねるような事をなさいましたと言いました。それで弟君はその事で王を非難しました。ところでこの王は、誰かに死を与える時には、そのために作られたラッパを持った伝令官を彼の門の前に送るという習慣を持っていました。それで、彼が非難された同じ夜、王はラッパを持った伝令官を弟の門前へ行かせ、ラッパを吹かせました。弟君はそれを聞くと、とても悲しみ、楽しい人生も最期と、その夜は一睡もしませんでした。そして翌朝、彼は喪服を着て、妻や子供たちと共に泣きながら王の宮殿へ来ました。王は彼を傍に来させると、言いました、『愚か者が、もしそなたが怒らせていないと分かっているのに、その兄の伝言を聞いてそれほど恐れるのであれば、余があれほどひどく怒らせた主なる神の使者たちを、どうして恐れないことがあるのか。その使者たちはそなたの門前のラッパよりはっきりと死を知らせ、また恐ろしい最後の審判の到来を教えてくださいのだから』

その後、王は四つの箱を作らせ、二つには金箔を貼らせ、中には死者の腐った骨をいっぱい入れさせました。そして残りの二つにはタールで塗り、中に宝石をいっぱい入れました。それから弟君に不平を訴えたことが分かっているあの高官たちを呼んで来させ、彼らの前にその四つの箱を置かせました。そしてどの箱が最も高価であるか彼らに尋ねました。すると彼らは黄金で飾られた箱の方が高価であると言いました。それで王がその箱を開けるよう彼らに命じると、中からひどい悪臭が出て来ました。その時、王は彼らに言いました。『これらは外側は高価な衣服を纏っているが、内側は罪の悪臭でいっぱいの人間たちに似ている』それから王が残りの二つを開けさせると、とても甘い香りが出て来ました。その時、王は言いました、『これらは余が深々とお辞儀をしたあの貧乏人たちに似ている。彼らは薄汚れた服を着ているが、内側はあらゆる徳の芳香で輝いているからだ。然るに、そなたらは外側に見えるものには注意を払うが、内側に何があるか考えようとしなさい』と。貴方は丁重に私を迎えて下さったので、その王がなさったのと同じことを私に対しなさいましたのです」それからバルラームは世界の創造、最初の人間の過ち、イエス・キリストの

受肉、最期の審判の日、善と悪の報酬について詳しく話し、偶像に仕える者たちを厳しく非難し、彼らの愚行について次のような譬え話をして言った。

「ある鳥刺が小夜鳴き鳥という小鳥を捕え、その鳥を殺そうとした時、その鳥に人間の声が与えられ、言いました。『確かに、私はとても小さいので、汝のお腹を満たすことは出来まい。しかし、もし私を放してくれたら、汝が大いに儲けられるよう三つの知恵を教えてやろう』男は小鳥がしゃべるのを聞いてひどく驚きました。が、三つの知恵とやらを期待して逃がしてやりました。すると小鳥は言いました、『手に入れることが出来ないものを決して手に入れようとしてはならない。失って取り戻すことが出来ないものを残念がってはならない。信じるべきでないことを信じてはならない』そして小鳥は彼の手から自由になって舞い上がると、言いました。『ああ、哀れな男よ、汝は今日悪い助言を聞いたんだよ。私のお腹には駝鳥の卵と同じくらい大きな宝石が入っているので、汝は今日大きな宝を失ったんだ』男はそれを聞くと、後悔し、その小鳥を取り戻そうとして言いました、『私の家に入っておいで。そうすればお前が必要とするものをみな与えてから、丁重に放してやるから』すると、小夜鳴き鳥は言いました、『汝が愚かであることがよく分かった。なぜなら、私が教えたことから何一つ得ていないからだ。と言うのも、汝は私を失ったことを残念がり、私を取り戻すことは出来ないのに、私を捕まえようとし、さらに私の中に大きな宝石があると思っただろう。私の体は駝鳥の卵ほど大きくないのに』と。偶像を崇める者たちがしているのも同じことで、自分たちの手で作った偽りの神々を信じ、それらを自分たちの守護神だと言っております」

それからバルラームはこの世の偽りの楽しみと虚栄を批判し、多くの立派な譬え話を引いて言った。「肉体の快樂を信じ、欲しがる者たちは、(魂の) 飢えのせいで仲間のキリスト教徒を死なせます。彼らには、一角獣に食われるのを恐れてその前から逃げた男の話が当てはまります。彼は逃げて行く時、深い穴に落ちましたが、落ちながら両手で木につかまり、すべすべした場所に足を置きました。そこへ一匹は黒く、一匹は白い、二匹のネズミが来て、休むことなくその木の根を齧ったので、根は二つに切れそうでした。そして穴の底を見ると、大きな竜が彼を食べようと開けた口から火を吐いています。そして足を置いた所にはそこから出てきた四匹の蛇の頭が見えました。そして上を見ると、その木の枝の間に小さな蜂蜜がぶら下がっていました。それで彼は目の前の危険をも忘れて、その少しの甘い蜜を味わったのです。ところで、一角獣は絶えず人間を追

いかけ、捕まえたがる死であります。そして穴は邪悪でいっぱいの世界であり、その木は昼も夜も刻一刻と磨り減って行くあらゆる生物の命です。そしてネズミは人間を表し、四匹の蛇が現れたすべすべした場所とは、四つの元素で出来ている身体のこと、それらの加減がくずれると、死に至ります。そして恐ろしい竜とはすべての生き物を食べようと待ち構えている地獄の口のこと、木の枝[からしたたる蜜]とは、絶えず人々を欺き、目の前の危険から目を背けさせる世界のことです」

さらにバルラームは、世界を愛する者は三人の友を持ち、一人目は自分と同じほど愛し、二人目は自分ほど愛さず、三人目はほとんど或いは全く愛さなかった人に似ていますと言った。「ある時、彼は大きな危機に陥り、王の御前に出頭するよう召喚されました。この男はたいそう悲しみ、心配し、一人目の友人の所へ行きました。そして彼に助力を頼み、これまで如何に彼のために尽くしたか語りました。友人は彼に答えて言いました、『何で君が困っているのか分からない。僕には他にも友人がいて、今日、一緒に遊びに行かねばならないのだ。今後、僕の友人となる人たちなんだ。でも、薄い布をあげるから、それで身体を覆うといい』それで彼は困惑して二人目の友人の所へ行き、助力を求めました。すると友人は答えました、『勘弁しておくれ。僕はすることがたくさんあり、君の争いに同行することはできない。でも、宮殿の入口までは連れて行ってあげよう。それから僕はこの家へ引き返し、本来の仕事を片づけよう』それからその男はとても悲しみ、絶望して三人目の友人の所へ行きました。そして恥ずかしそうにして彼に言いました、『僕はこれまであまり君を大切に出来なかった。君にお話する立場にはないのだが、今、僕は大きな試練に直面しており、友人も失いました。だから、どうか僕を哀れに思い、助けて下さい』すると友人は嬉しそうな顔をして答えて言いました、『確かに、たとえ僅かでも、君が僕のためにしてくれた親切を忘れたことはありません。だから、僕は君の真の友であることを認めます。では、王の御前へ行き、君のためにお願ひしましょう』と。ところで、一人目の友人とは人々を多くの苦難に落とし入れるこの世の財産のことで、死が訪れると、埋葬するための古い布以外には何も残しません。二人目の友人とは、彼の妻と子供と親族のことで、彼のことを同情はするものの、その後、自分の仕事に戻ってしまいます。三人目は信仰と希望と、施しなどの慈善行為のことで、私たちが肉体から出る時は常に、私たちより先に行って私たちのために王にお願ひしてくれます」

さらにバルラームはこの主題に関連して次の話をした。

「ある大きな都市には、毎年、見知らぬ男を王に選ぶという慣わしがありました。その一年間、彼はしたいことを何でもする権限を有し、たいそう贅沢に、たいそう楽しく暮らし、そういう状態がいつまでも続くと思っていました。ところが、突然、その年の終わりに人々が彼に逆らって立ち上がり、彼から一切の富を奪うと、彼を裸にして町中を連れ歩き、それから彼を食べ物も着る物もなく、飢えと寒さで苦しむ島へ追放しました。それから人々は別の人を擁立したいと思い、彼らの習慣を知っている者を選びました。ところが、彼はその年の間中、莫大な財宝を数知れずあの島へ送っていました。そしてその年が満ちると、彼もそこへ送られました。が、他の王たちはその島で飢えと寒さのために亡くなったのに、彼はたいそう楽しく暮らしました。ところで、この都市はこの世界のことであり、市民たちとは私たちがこの世の偽りの楽しみで引っ張る暗黒の王たちです。そして私たちが知らないうちに、死がやって来て、私たちは暗黒の地へ追放されます。前もって送られる財宝とは貧しい人々の手によって作られるのです」

バルラームが王子に熱心に教えた結果、王子が父親に仕えるのを止めたいと言うと、バルラームは言った、「もし貴方がそうなれば、ある貴人からたいそう高貴な女人を与えられたものの、それを断って逃げた若者に貴方は似ているでしょう。その若者は、ある所で熱心に働き、その口で神を讃える或る貧しい乙女を見て、彼女にこう言いました、『お前はそんなに貧しく、そんなにあくせく働きなから、あたかも神から莫大な財産をもらったかのように感謝を捧げているのは何故かね』すると、彼女は答えて言いました、『小さな薬がしばしば大きな病を治すように、そのように小さな贈物に対する大きな感謝は、大きな贈物の与え手となるのです。外側にあるものは私たちのものではないからです。だから私は神から大きな贈物を受け取っております。と申しますのも、神は私をそのお姿に似せてお造りになり、理性と理解力を与えて下さり、私をその栄光の至福へと呼んで下さったからです。だから私はそれらの大きな贈物に対し、絶えず神を讃えねばならないのです』この若者は彼女がとても賢い女性だと分ると、彼女の父親に結婚させて欲しいと頼みました。すると父親は言いました、『娘をやることは出来ぬ。君は裕福で高貴な人の息子だ。しかし、私と私の娘は貧しい』そこで若者が熱心に頼むと、彼は言いました、『君の父上の家へ連れて行くのであれば、断じて娘を与える訳にはゆかぬ。彼女は一人娘なのでな』そこで若者は言いました、『では、私が貴方と一緒に住み、何事も貴方に従いましょう』それから彼は自分の高価な服を脱ぎ、その貧しい老人の服を着ました。そして彼の娘を自分の妻とし、彼女の父親と一緒に住み、出来るだ

け質素に暮らしました。こうして老人は長いこと若者を試した後、彼を自分の部屋へ連れて行きました。そしてそこで若者が今まで見たことがないような莫大な財産を彼に見せ、その財産をすべて彼に与えたのです」

するとヨサファトが言った、「その話は私に関係している。そなたは私のためにその話をしたのであろう。ところで、良き師よ、私は決して貴方から離れませんから、貴方がどこに住んでいるか、また何歳であるか教えて下さい」すると彼は言った、「私はシナールという国の荒野に四十五年住んでおります」するとヨサファトは言った、「では、師よ、貴方は七十歳を超えていらっしゃるのですね」すると彼は言った、「もし私が生まれてからの年齢をお尋ねであれば、おっしゃる通りです。しかし、私はその年数を私が生きていた年数には含めません、特に、空しい世界で過ごした年数は。と言いますのも、その頃の私は神に対し死んでいたのです、死んでいた年数は生きていた年数として数えないのです」そしてヨサファトが彼に従って荒野へ行きたいと言うと、「もし貴方がそうなされば、私と友達にいることは出来ないでしょうし、また私は兄弟たちが迫害される原因ともなるでしょう。しかし、適切な時が来たら、荒野の私の所へおいでなさい」それからバルラームは王子に洗礼を施し、信仰の道をしっかり教えてから、再び自分の庵へ帰って行った。

王は息子がキリスト教徒になったことを知ると、大いに悲しんだ。すると、王の親友がこのように言って王を慰めた、「陛下、私はあらゆる点でバルラームにそっくりの同門の老人を知っております。彼にバルラームであるかのように装わせ、キリスト教徒の信仰を擁護させましょう。その後、自ら論争に負けさせ、彼が教えたことをすべて取り消させます。そうすれば、王子は陛下の許へお帰りになるでしょう」それから王はバルラームを捕えるために軍勢を率いて行き、その隠者を捕えると、バルラームを捕えたと触れさせた。王子はバルラームが捕えられたと聞くや、激しく泣いた。しかし、神の啓示によりそれがバルラームでないことを知った。それから王は息子に会いに行き、「息子よ、そなたは余を大いに悲しませた。余の年齢を考慮に入れず、余の眼の光を暗くした。何故そんなことをした？余の神々への崇拝を捨てたのだな」すると彼は王に答えて言った、「父上、私は暗闇から逃れて生命の中に入り、誤りから逃れて真理を知りました。それ故、無益な骨折りをなさないで下さい。私をイエス・キリストから引き離すことはお出来にならないのですから。その手で天の高みに触れることは出来ませんし、大海を干すこともお出来にならないのと同じです」すると、王は言った、「余は如

何なる父も息子を大切にすることがないほど、それほど立派にお前を育てたのに、いったい誰がこのような悪事を余に働いたのだ？お前の思い上がりや邪心が、余に逆らうという狂気を抱かせたのであろうが、それには訳がある。お前が生まれた時、占星術師たちがお前は思い上がり、一門に反抗するであろうと言ったのだ。だから、もし今お前に余に従う気がないのであれば、もはやお前を息子とは思わぬ。余はお前の父ではなく、お前の敵となって、余が敵に対してしたことがないようなことをお前にするであろう」ヨサファトは王に言った、「父上、それほどお怒りになるとは、どこがご不満なのですか。私が善人たちの王子になったからですか。でも、どこの父親が息子の幸せを悲しむでしょうか。もし父上が私に反対なさるのなら、もはや貴方を父とは呼ばず、蛇のごとく貴方を追うでしょう」

それから王はたいそう怒って彼の許を離れると、友人のアラーキに息子の強情さについて話した。すると友人は、子供は強く厳しい言葉より優しい言葉に惹かれますから、厳しいことを申されますなど助言した。翌日、王は息子の所へ来ると、彼を抱き締め、口づけをして言った、「可愛い息子よ、余の年齢を尊重しておくれ。さあ、善良な息子よ、そなたの父を敬いなさい。そなたも知っているだろう、父に従うのが如何に良いことで、彼を喜ばせるか。反対に、父を怒らせ、悲しませるのは如何なる罪であるか。父を怒らせる連中はひどい死に方をするのだよ」すると、ヨサファトは王に言った、「愛する時があり、憎む時があります。戦う時があり、和らぐ時があります。だから、私たちを神から遠ざけようとする者には、たとえ父であろうと母であろうと、決して従うわけにはまいりません」父は息子の決意の固さを知ると、彼に言った、「お前の愚かさや、お前が余に従う気がないことが分かったからには、お前をたぶらかしたバルラームがきつく縛られて牢獄にいることを知らせておこう。我々は我が宗徒とお前たちの宗徒を、バルラームも含めて一緒に集めるつもりだ。そしてすべてのキリスト教徒に恐れることなく来るよう、そして論争に加わるよう触れを出そう。そしてもしお前たちバルラーム側が勝てば、我々はお前の宗教を信じよう。しかし、我々の側が勝てば、お前たちが改宗するのだ」そしてこの案を王子はとても気に入りました。それからバルラームと名乗る男に命じて、最初はキリスト教を擁護し、その後、言い負かされるよう手筈が整えられた。

ヨサファト王子はバルラームと名乗るナコールという男の方を向いて言った、「バルラームさま、貴方は自分が如何に私に教えたかよく覚えておいででしょう。もし貴方が私に教えた宗教を擁護できれば、私は死ぬまで貴方の教えを

信じましょう。しかし、もし貴方が言い負かされたなら、私への侮辱として復讐するでしょう。つまり、二度と王子に過ちを犯させないよう、この手で貴方の頭から舌を引き抜き、犬どもに与えます」ナコールはこれを聞くと、自分が掘った墓穴に落ちたと分かり、後悔し、ひどく不安になった。それから思案をめぐらし、王がキリスト教を隠せず擁護するようにはっきり命じたのだから、ここは王子の側について死を免れた方が無難だと思った。その時、学者の一人が言った、「貴方が王子をたぶらかしたバルラムですか」と彼は答えて言った、「私は王子を迷妄からお救いしたバルラムです。王子に過ちを犯させてはおりません」と、学者は言った、「とても気高く高名な人たちが我々の神々を崇めているのに、どうして貴方はそれに背を向けるのですか」そこで彼は答えた、「カルデアとエジプトとギリシアの人々は過ちを犯しました」さらに彼は言った、「彼らは人間の役に立つべく造られた被造物を神々とし、それらの家来となったのです。それ故、彼らは多くの病気で損なわれています。また、ギリシア人も呪われた人間をサトゥルヌスのような神々だと思っており、彼らが言うところでは、この神は自分の息子たちを食らい、自分のペニスを切って海に投げ込み、そこからウェヌスが生まれた、そして彼は息子のユピテルによって縛られ、地獄に投げ込まれたそうです。また、彼らはユピテルこそ神々の王であり、彼はしばしば密通するために、動物の姿に化けて現われたと言います。[また、ウェヌスも]ある時はマルスを、ある時はアドニスをつにしました。エジプト人は仔牛や豚といった動物を崇めました。しかし、キリスト教徒は天から降って肉体を持たれたいと高き王の息子を崇めます」

このようにナコールはキリスト教徒たちの信仰をとて力強く擁護し、とても力強い理由を示したので、他の学者たちはみな恥じ入り、何と答えるべきか分かりませんでした。その時、ヨサファトは父王に言いました、「明日の論争のために今夜相談したいので、私の学者を今夜私にお返し下さい。そして父上はご自分の学者たちを連れて行き、ご相談なさって下さい。と言いますのも、もし父上が私の学者を連れて行かれたら、私は不利になるからです」王は、ナコールが王子を欺いてくれると期待してそれを許した。そして王子のヨサファトはナコールと一緒にになると、彼に言った、「私が貴方を知らないと思いますか。貴方はバルラムではなく、占星術師のナコールであると承知しています」それからヨサファトは彼に救済の道を説き、彼をキリスト教に改宗させ、荒野へ送った。そして彼はその地で洗礼を受け、敬虔な隠者の生活を送った。

その頃、テオダスという魔術師がいた。彼はこれらの事を聞くと、王の御前へ行き、王子を我々の神々の宗旨に改めさせますと言った。すると王は彼に言った、「もしそうしてくれたら、そなたを崇めて黄金の立像を造り、我が神々にするように生贄を捧げよう」とすると魔術師は王に言った、「現在、王子の周りにいる者たちをみな遠ざけ、代わりに上手に着飾った美しい乙女たちを置いて下さい。そして彼女らに決して王子から離れず、絶えず彼に仕え、一緒にいるようにお命じ下さい。そうすれば私が悪しき霊を送って王子の情熱に火をつけましょう。女の美しさほどすぐに若い男を騙せるものはありませんから」として彼は次の譬え話をした。

「かつて一人の息子しか持っていない王がいました。そして賢い医者たちは、もし王子が十年以内に太陽か月を見たならば、視力を失うだろうと言いました。そこでこの子供は深い洞窟にある岩山の中で育てられました。そして十年が経ち、彼が外に出された時、王は、王子の前にありとあらゆる種類のものを持って来るよう命じました。王子がそれらを知り、名を覚えるためです。そして彼の前に馬や、金や銀の貴金属や、宝石、その他多くの物が運ばれて来て、[家臣たちは]あらゆるものの価値を彼に説明しました。それから華やかに着飾った女たちが連れて来られると、王子はこれらはいったい何だ、と熱心に尋ねました。家臣たちがすぐには教えなかったからです。それで彼は悲しさと苦しさでいっぱいになりました。それから王の傍にいた騎士見習いの頭が、食卓に着いていた王子に言いました、『あれは男を騙す悪魔です』と。それから王は息子に、彼がこれまで見た中で何が一番楽しかったか尋ねました。すると、王子は答えて言いました、『父上、男を騙す悪魔ほど私が欲しいと思うものはありません』と。それ故、陛下、いつでも王子を好色へと導くことが出来る女たちを除いて、王子を打ち負かせる者はいないと思召し下さい」そこで王は彼の傍からすべての家来を退かせ、代わって上手に着飾った美しい女たちを置き、絶えず傍に侍って王子を馬鹿げた娯楽や遊びに導かせました。それから王子の欲情に火をつけるべく悪い霊が送られ、この若者は心の中に大きな不安と燃えるような感覚を覚えました。そして外側からは乙女たちが彼に残酷な戦いを仕掛けました。そして王子は自分がそのような困難と不幸な状態にあるのを知ると、一切を神に委ねました。そして神の慰めを得て、すべての誘惑を退けました。

そこで王は、ある王の娘で、孤児となっていた一人の美しい乙女を王子に送りました。すると、神の僕であるヨサファトは、彼女に[キリスト教の教えを]説き始めまし

た。すると彼女は言いました、「もし貴方が私を助け、偶像の崇拝を止めさせたいとお思いならば、どうか私と結婚して一緒になって下さいませ。と言いますのは、キリスト教徒は結婚を軽蔑しておりませんし、族長や預言者や使徒ペテロたちも妻を持っていたからです」するとヨサファトは言いました、「私にそう言っても無益なことだ。なぜなら、キリスト教徒が妻を娶るのは違法ではないが、純潔を誓った者が結婚するのは違法なのだよ」すると彼女は言いました、「では、貴方の思うようになさいませ。でも、私を助けたいと思し召しならば、私のささやかな願いを叶え、一夜だけ私と一緒に寝て下さい。そうすれば、私は明日キリスト教徒になるとお約束します。なぜなら、天国の天使たちは悔い改めをする罪人を喜ぶと貴方がたキリスト教徒は申しているからです。だから、どうか一度だけ私の願いを叶えて下さい。そうすれば貴方は私をお救いになれるでしょう」それから彼女は王子の魂と良心を激しく揺さぶり始めました。その時、悪魔は仲間たちに言いました、「この若い娘が我々より大きなことをしたのが分からないのか。さあ、今が適切な時だ、彼女を加勢に行こう」そしてこの敬虔な若者は、肉体の欲望には苛まれるやら、あの娘は悪魔の教えから助けてやりたいやらで、自分が大変な窮状にあるのを知ると、彼は大いに悲しみ、泣きながら神に祈り、とうとう眠り込みました。それから彼は眠りの中で、美しい香りのよい花が咲き乱れる美しい牧場へ連れて行かれる夢を見ました。そこでは木の葉が心地よい風に吹かれて優しい音を立て、馥郁（ふくいく）たる香りがしました。その場所の果実は見るからに見事で、とても美味しそうでした。そして宝石をちりばめた黄金や白銀の椅子があり、澄みきったきれいな小川がその場所を流れていました。その後、壁が素晴らしい黄金で出来、驚くほどの透明な光で輝いている町に入りました。そしてかつて人間の耳が聞いたことがないような歌を歌う者たちが見えました。そしてここは祝福された者たちの来る所だと告げられました。そして彼らがそこから彼を連れ出そうとしたので、彼はまだそこに留まらせて欲しいと頼みました。すると彼らは言いました、「もしそなたが耐えられるなら、後で大いに苦労してここへ来ることが出来よう」そしてその後、彼を至るところ真っ暗で、ひどい悪臭のする場所に連れて来ると、彼らは言いました、「ここは邪悪な者たちのための場所です」と。そして彼は目を覚ますと、あの乙女や他のすべての女性たちの美しさが、死体より嫌なものとなりました。

そして悪霊たちがテオダスの許に戻って来たので、彼らを叱りつけると、彼らは言った、「我々は出来ることはすべてやったし、彼が十字の印を切るまで、ずっと悩ましてやったのですが、しかし、彼はその印で武装すると、我々

をさんざん苦しめたのです」それからテオダスはヨサファトに影響を及ぼしたと思い、彼と共に王の御前へやって来た。しかし、その魔術師は、捕まえたと思った者に捕まえられ、改宗させられた。そして洗礼を受け、その後も穏やかな生活を送った。それで王はすっかり希望を失い、友人たちの助言で、王国の半分を息子に譲った。そして王子は荒野に行きたいと心から望みただけで、キリスト教の信仰を広めるため、一定の間、王国を治めた。そして自分の国に教会を造らせたり、十字架を立てさせたりして、人々をイエス・キリストに改宗させた。そしてついに父親も息子の道理と説得に同意し、イエス・キリストの信仰と洗礼を受け入れた。そして王国を息子に譲り、償いの苦行を自らに課し、穏やかに生を終えた。

ヨサファトは荒野へ引き籠りたいと、何度もバラキエル王に告げたけれど、その度に臣民たちに引き留められた。が、彼はとうとう宮殿を飛び出した。そして荒野を歩いていると、一人の貧しい男と出会い、彼に王の衣服を与え、自分は貧しい上着をまとった。それから悪魔が彼に激しい戦いを何度も仕掛け、ある時は抜き身の剣を持って彼に襲いかかり、荒野から出て行かなければ殺すぞと脅した。またある時は、野生の獣の姿をして現れ、彼をむさぼり食おうと襲いかかった。しかし、王子は穏やかに言った、「私には我が主イエスがついておられる。お前が私にすることは何も恐れないぞ」と。こうしてヨサファトは二年間、荒野を歩きまわったが、バルラームを見出すことはできなかった。しかし、ついに地中に洞穴を見つけ、入口に立って叫んで言った、「父よ、私に祝福を与えて下さい」バルラームは王子の声を聞くと、立ち上がって出て来た。そして二人は大喜びして口づけをし、抱き合った。それからヨサファトは我が身に降りかかったことをすべてバルラームに話し、神に感謝した。それからヨサファトもそこに留まり、忍耐と徳に満ちた生活を何年も送った。そしてバルラームの寿命が尽きると、我が主の年の480年頃、安らかに眠りについた。そしてヨサファトは二十五歳で王国を譲り、三十五年間、隠者の暮らしをし、数々の徳と共に安らかに眠り、バルラームの隣りに埋葬された。そしてバラキエル王はこれを聞くと、大勢の供を連れてその場所へやって来た。そして二人の遺体を取り出し、たいそう厳肅に都へと運んだ。そして神は自分を崇め、讃えるよう、その聖なる遺体のために数々の奇蹟を行った。アーメン

ここにバルラームの伝記は終る。

## 解題

今回、訳出するのに使用したテキストは、池上恵子著『バルラームとヨサファトの物語』（1991）にあるもので、

この本文は中期英語の写本 British Library, Egerton 876から採られている。そしてこの聖者伝は、13世紀に中世ラテン語で書かれた『黄金伝説』にも収められていることから分かるように、キリスト教の聖者伝である。日本へもキリシタン文書として16世紀末に伝来している。加津佐版『サントスの御作業』の「貴きさん ばるらんと さん じよさはつの御作業」がそれである。しかし、池上(1991)によれば、この聖者伝は元々、東方起源の仏陀伝であったらしい。もう一つの写本 Cambridge, Peterhouse 257のテキストを校訂した John C. Hirsh も、キリスト教の聖者伝説にも拘わらず、“A Middle English Text of Buddha”という副題をつけている (E.E.T.S. O.S. 290)。

修道士のバルラームが王子のヨサファトに語る話に「小鳥の説教」がある。この話は、ペトルス・アルフォンシというキリスト教に改宗したユダヤ人医師が、1106年頃アラビア語からラテン語に訳した『知恵の教え』にも入っており、この本を通してさらに『イソップ寓話』にも入った。だから、文語体の国字本『伊曾保物語』にも「鳥人に教化をする事」として出て来るのであるが、小堀桂一郎著『イソップ寓話 その伝承と変容』(中公新書)によれば、この主題はガストン・パリスなど多くの学者によって研究され

ているそうである。つまり、「小鳥の説教」は古代インドの仏教文学『パンチャ・タントラ』まで遡るらしい。同じく、バルラームがヨサファトに語り聞かせる「三人の友」の話も『パンチャ・タントラ』まで遡るらしい。

『パンチャ・タントラ』(「5篇の物語」の意)とは、西暦200年頃(?), サンスクリット語で書かれたインドの説話集のことで、「全体の枠物語によれば、アマラシャクティ王の委嘱によって、賢明なバラモンのビシュヌシャルマンが3人の王子に、王者としての教育を授けるため、寓話に託して処世、統治、外交、倫理等の要訣を教えたということになっている」(『世界大百科事典』)。児童向け書籍としては世界最古。5巻から成り、84の説話が収められている。ペルシア語やヘブライ語にも訳されており、ペルシア語版は『カリーラとディムナ』(8世紀)という。このペルシア語版は、13世紀にユダヤ人のカプアのヨハネスによってヘブライ語訳からラテン語に訳されており(題は『人生指針』)、また13世紀にはフランス語の散文訳やスペイン語訳もあった。『バルラームとヨサファトの物語』や『イソップ寓話』に見える「一角獣の話」も、実は、『カリーラとディムナ』の序章に加えられて広まったものらしい。